

日本統治期台湾における国立公園の 風景地選定と心象地理

神田 孝治

- I. はじめに
- II. 台湾における国立公園の選定過程とその特徴
 - (1) 国立公園の選定過程と観光開発
 - (2) 国立公園の風景と台湾八景
- III. 台湾における国立公園候補地をめぐる論争
 - (1) 第一回台湾国立公園委員会における議論
 - (2) 早坂一郎による国立公園候補地の選定に対する異議
- IV. 台湾における熱帯的風景と山岳的風景の心象地理
 - (1) 田村剛の熱帯的風景への注目とその変容
 - (2) 植民地住民の心身と山岳的風景の心象地理
- V. おわりに

I. はじめに

第二次世界大戦前（以下、戦前期とする）の日本における観光資源としての国立公園の成立について検討した荒山は、国立公園の指定によるオーセンティシティ（真正性）の創出について論じ、そこから「観光資源が国家の構成員としての国民にとって、意味や価値が共有されるような国土空間の成立に寄与した」ことを指摘している¹⁾。また、国立公園

に指定された風景は、「国家や国民のアイデンティティを示すナショナリズムと、きわめて親和的な風景」だとし、国立公園候補地の変遷を検討するなかで、「山岳や溪谷、森林」が「日本を代表する風景」とされたことも論じている²⁾。このように荒山は、戦前期日本における観光資源としての国立公園は、ナショナリズムと親和的な国家の真正な風景として「山岳や溪谷、森林」を選び出す中で、均質化された国土空間を生産するものであったことを明らかにした。

しかしながら、アーリ (Urry, J.) が観光客のまなざしに関する議論において、観光客が日常との違いを観光空間に求めることを指摘したように³⁾、観光に注目して国立公園を考える際には、差異や他性の問題にも注目する必要がある。モダニティの空間的特徴については、それが均質化と同時に差遣化を求める矛盾した空間であることを指摘したルフェーブル (Lefebvre, H.)⁴⁾をはじめとして、その両義的で矛盾した性質が近年議論されているが⁵⁾、こうした視点は観光資源としての国立公園を考える際にも重要となる。

また荒山の国立公園風景についての考察は、地理的表象がはらむ権力の問題に注目し、それを産み出すモダニティを批判的に検討する「新しい文化地理学」として位置付けることができる⁶⁾。文化論的転回や文化の政治学とも呼ばれるこのような研究動向に対し

キーワード：国立公園，風景，心象地理，観光，政治

て、物質性や生きられた経験を事実上無視してしまうことが近年指摘されるようになり、物質論的転回などと呼ばれる新しい研究の動きが生じている。こうした研究の特徴としては、ある事象の顕在を、関係的に、そして動的に理解し、その生成の過程を問うことにある。そのなかで、言説的なものと物質的なものとの関係性も問い直されているのである。かかる視点からすれば、国立公園の風景についても、権力との繋がりを指摘することに力点を置くのではなく、アイデンティティ、権力、イメージ、感情、物質などの複雑な関係性のなかで、それがいかに生成したのか、その動的な過程を検討することが求められる。

そこで本稿では、国立公園の風景地について、国家・国民にとって真正なアイデンティティの中心であるという特徴だけでなく、観光地としての他性の特徴にも注目しながら、さまざまな関係性が絶えず変容するなかでそれが生成した動的な過程を考察することにした。こうした検討を行う際に興味深い事例として、明治28(1895)年から昭和20(1945)年まで日本の植民地支配下にあった台湾における国立公園選定がある。日本の植民地の中で唯一国立公園が指定された台湾では、荒山が指摘するように、昭和12(1937)年に「山岳、溪谷、森林を特徴とする台湾の風景」⁷⁾として3ヶ所の地域が国立公園に指定されていた。しかしながら、台湾は(亜)熱帯気候であったため、日本人が他性を感じる熱帯的風景こそが観光客を呼び寄せるのに役立ち、またそれこそが台湾を代表する風景であると考え一部の台湾在住日本人知識人が、山岳的風景地ばかりの国立公園の選定場所に異議を唱えるという状況が生じていたことを筆者は既に確認している⁸⁾。すなわち、日本統治期台湾における国立公園の指定と観光は必ずしも親和的ではなかったものであり、この事例を取り上げることで、国立公園という空間が有する両義性や矛盾、そしてそこから生じる

ゆらぎが明らかになると同時に、その選定過程における様々な関係性の変化や風景の意味の変容および重層性がより検討しやすいと考えられるのである。

また本稿では、日本統治期台湾の国立公園選定におけるゆらぎを産み出した主たる要因であり、また様々な関係性のなかでその意味が変容することになった、心象地理に注目したい。よく知られるように、心象地理とは、サイド(Said, E.)が著書『オリエンタリズム』⁹⁾において論じたものであり、「なじみの深い『自分たちの』空間と、その自分たちの空間の彼方にひろがるなじみのない『彼ら』の空間とを心のなかで名付け区別」¹⁰⁾することによって二項対立的に生み出されるものである。特に他所の心象地理は、ポストコロニアル研究において、観光客などの支配者側の欲望やファンタジー、アイデンティティの問題を明らかにするものとして¹¹⁾、表象と権力の問題を検討する新しい文化地理学においてしばしば焦点があてられてきた。こうした心象地理に注目することで、(亜)熱帯地域に位置する植民地台湾の国立公園の風景を、アイデンティティと他性、ナショナリズムや帝国主義がはらむ権力、そして観光とを関連づけて考察することが容易になるのである。そのため本稿では、「山岳、溪谷、森林」を特徴とする山岳的風景の心象地理と、(亜)熱帯植物を特徴とする熱帯的風景の心象地理の相互関係に焦点をあてるなかで、台湾の国立公園の選定過程について検討することにした¹²⁾。

そこでまず第二章では、台湾における国立公園の選定過程について確認すると同時に、選定された風景の特徴を明らかにする。次の第三章では、台湾の国立公園の候補地決定に際してなされた論争から、顕在化したさまざまな対立について検討を行う。そして第四章では、台湾の熱帯的風景と国立公園に選定された山岳的風景の心象地理について、アイデンティティ、観光、権力、感情などとの結び

つきやそれらの関係性の変容について考察する¹³⁾。

II. 台湾における国立公園の選定過程とその特徴

(1) 国立公園の選定過程と観光開発

日本統治期台湾における国立公園選定過程にみられる特徴を考えるにあたり、まず日本(内地)における状況を簡単に確認しておきたい。日本に国立公園が紹介されたのは明治30年代末からで、明治5(1872)年に世界で最初に誕生したナショナル・パークであるアメリカ合衆国のイエローストンなどが、国園などの名で観光資源としての性質が注目されながら伝えられていた。そして、明治44(1911)年の第27回帝国議会で「国設大公園設置に関する建議」をはじめとする国立公園の設置に関する3件の建議・請願が採択され、国立公園設置の運動が開始されることになった。これらは当時の外国人観光客誘致の潮流や、明治50(1917)年開催予定の日本大博覧会を背景とした、観光資源整備による地方経済振興という意図が含まれたものであった。その後、国家及び地方の観光事業振興の潮流と折り重なるかたちで、大正9(1920)年からの内務省衛生局保健課による国立公園調査、昭和2(1927)年の衛生局内での国立公園協会の設置、昭和5(1930)年の国立公園調査会の設立、昭和6(1931)年の国立公園法の公布と事業が進展し、昭和7(1932)年には国立公園委員会が12の候補地を決定して、昭和9(1934)年と昭和11(1936)年に順次国立公園の指定がなされている¹⁴⁾。

このような過程で指定された国立公園はすべて内地のものであったが、その議論の初期においては植民地も視野に入っていたことが認められる。特に内務省衛生局囑託として国立公園の選定に深く関わった田村剛は、彼が大正10(1921)年に選出された16ヶ所の国立公園候補地のうち、さらに一流として選出

した4ヶ所の候補地の中に朝鮮金剛を入れるなど¹⁵⁾、植民地への国立公園設置を早くから想定していた。田村は昭和3(1928)年に台湾を訪れた際にも、「朝鮮に一つ台湾にも一つ選定され内地の公園組織のうちに取入れられるのではないかと思います¹⁶⁾」と言及しており、上述の内地で進行する国立公園選定の範疇に植民地のそれも含まれると考えていたのである。しかしながら、昭和6(1931)年に公布された国立公園法の効力は内地に限られ、植民地においては台湾総督府などの植民地当局とそれを監督する拓務省によって調査研究された後で新たに勅令によって施行される場合があるとされた¹⁷⁾。同年11月の第一回国立公園委員会総会においては、植民地に国立公園が設定できるかとの質問がなされており、拓務省側から国立公園委員会と連絡をとり何れ適当に考慮されるとの返答がなされている¹⁸⁾。そして実際に、内地で12ヶ所の公園候補地が決定された後、台湾総督府は、昭和8(1933)年に国立公園調査会を立ち上げ、昭和10(1935)年に勅令273号で台湾に国立公園法を施行して、昭和11(1936)年の第一回台湾国立公園委員会でも候補地を決定し、昭和12(1937)年に大屯、次高タロコ、新高阿里山という3ヶ所の国立公園を指定している¹⁹⁾(図1参照)。

これら3ヶ所の国立公園のうち、早くから注目されていたのは新高阿里山であり、なかでも阿里山は台湾における国立公園指定に関する議論の契機となった地域であった。阿里山とは、明治32(1899)年に発見された大森林で、明治37(1904)年から後藤新平民政長官主導の下で開発計画が進められ、大正元(1912)年に登山鉄道が開通してから森林経営が行われた、官営の伐木事業地を指している²⁰⁾。この地における伐木経営は、台北帝国大学農林専門部教授の青木繁が、大正15(1926)年に阿里山の針葉樹林は13年後には枯渇すると指摘したように²¹⁾、次第に行き詰

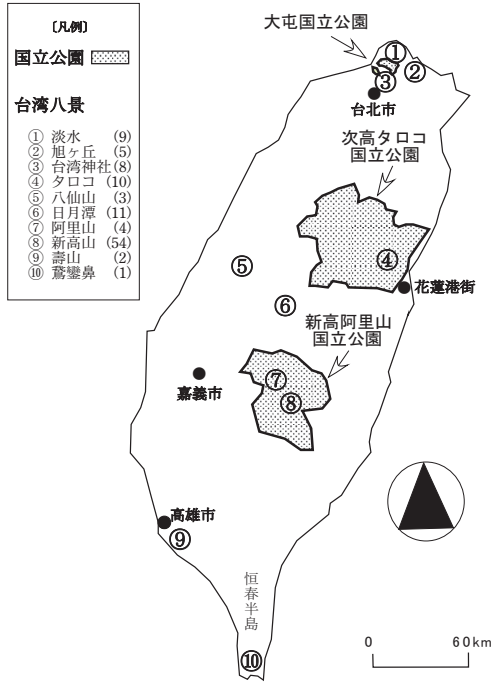


図1 日本統治期台湾における国立公園と台湾八景の位置概略図

注：1) 国立公園は昭和12（1937）年指定。台湾八景は昭和2（1927）年選定。
 2) 台湾八景は、③と⑧が別格として選定されたため、計10カ所選定されていた。
 3) 台湾八景の名前右の括弧内の数字は、人気投票における順位である。

資料：『国立公園図 五十万分の一（昭和13年1月）』をもとに筆者作成。

まりが予想されるようになっていた。そのため大正14（1925）年に阿里山に登った第10代台湾総督の伊沢多喜男が、阿里山への鉄道を永続させるために、林間学校や避暑・別荘地としての活用とともに、国立公園化をその方向性の1つとして提起するなど²²⁾、台湾総督府においても伐木減少に備えたあり方が模索されるようになった。そして昭和2（1927）年前後に観光客誘致のために阿里山の天然公園計画が叫ばれはじめ、小規模のものでなく、国立公園的大計画を立てようという殖産局長の高橋新吉の意見に基づき、田村が昭和3（1928）年に公園調査のため招聘され、その

後すぐに高橋は「阿里山を中心とする国立公園を造る」という方針を掲げている²³⁾。こうして、木材生産の地として開発された阿里山において、観光客誘致を目指した国立公園化が志向されることになった。

また、国立公園の設置に際しては、地元の誘致活動が活発に行われていたことも確認される。阿里山を中心とした国立公園化には、登山鉄道の起点の都市である、昭和5（1930）年に市制が施行された嘉義市（図1参照）が注目していた。この地の経済は、製糖業と同時に、大正3（1914）年に大規模な製材工場が設立されたことによって、林業が基盤となっていた。ところが、市制がはじまった頃にはその両者とも停滞しつつあったこともあり、国立公園化が叫ばれる阿里山や周辺地域の景勝地への起点として、さらには市内に発達した遊廓による「美人郷」の名で、嘉義市の経済振興を図ることが官民双方から叫ばれるようになっていき、「観光都市」としての市のあり方が掲げられるようになっていた。なかでも観光都市化に重要な役割を果たすと考えられた阿里山の国立公園化を目指すため、昭和6（1931）年に嘉義市役所の役人と地元の商工業者は阿里山国立公園協会を市役所内に設立し、機関誌『新高阿里山』を発行するなど、国立公園誘致運動を積極的に展開していったのである²⁴⁾。また次高夕ロコ国立公園も、同年から花蓮港庁が国立公園候補地としての売り出しを模索し、昭和7（1932）年に東台湾勝地宣伝協会を花蓮港街役場内に設置して、官民一体となって国立公園誘致運動をはじめており、嘉義市側と国立公園候補地をめぐって政治的争いを展開していた²⁵⁾。大屯国立公園については、御大典記念事業として本多静六と田村に昭和3（1928）年に公園設計を依頼していたが²⁶⁾、国立公園誘致活動としてはやや遅れた昭和9（1934）年に台北州に大屯国立公園協会が設置²⁷⁾されている。この協会の設立に際しては、昭和10

(1935)年に開催予定の始政四十周年記念台湾博覧会を視野に入れるべきだとの提起がなされており²⁸⁾、実際に博覧会場の分館である観光館が大屯山麓の草山に設置され、またその中では国立公園の候補地が紹介されていた²⁹⁾。このように、台湾における国立公園の選定は、内地の場合と同じく、観光客誘致による地方経済振興策の一つと考えられるなかで進展していたのである。

(2) 国立公園の風景と台湾八景

以上のように、結果的には誘致運動が起こっていた地域が国立公園に選定されているものの、その過程を考えると候補地選定の主体は常に台湾総督府であったことが確認される。阿里山の国立公園化が台湾総督府によって先鞭がつけられたのはもちろんのこと、東台湾勝地宣伝協会や大屯国立公園協会の設立も台湾総督府が候補地として取り上げてからのことであった³⁰⁾。また、これら3ヶ所の国立公園調査にはすべて田村が携わっていたが、彼自身も台湾総督府が候補地としていた地域を国立公園適地としてお墨付きを与えただけで、自身で積極的に選定したわけではない。そのため彼は、阿里山一帯の国立公園調査を依頼された時には、台湾においては1つの国立公園が選定されるだろうと述べていたが³¹⁾、次高タロコの調査以降は、適地があれば2つでも3つでもかまわないと³²⁾、現地の状況に応じて候補地数についての考えを変化させていたのである。

実際に国立公園候補地の調査にあたったのは、台湾総督府が昭和8(1933)年に立ち上げた国立公園調査会であった。その構成員は、会長を総務長官とし、17名の委員のうち台北帝国大学総長以外はすべて台湾総督府の役人であった³³⁾。また台湾総督府内で国立公園を担当したのは内務局土木課であり、昭和8(1933)年に開かれた第一回国立公園調査会では、この土木課長によって国立公園に関す

る説明などがなされている³⁴⁾。これは昭和3(1928)年の阿里山の国立公園調査時に、先の高橋殖産局長が、「国立公園となれば相当な道路を作らねばならぬから内務局土木課の事業として実行してもらはねばならぬ」³⁵⁾と述べていたことから、観光開発を視野に入れてのことと考えられる³⁶⁾。そして、この国立公園調査会は、昭和8(1933)年と昭和9(1934)年の2回の会議で「国立公園法施行に関する件」と「国立公園選定に関する件」を審議し、どちらも内地の法案・方針に準じる事に決定している³⁷⁾。その結果、国立公園の選定基準としては、表1のような内地と全く同じものが適用され³⁸⁾、それに基づいて国立公園調査会は表2のような理由から、最終的に選定された地域とほぼ同様の3カ所の国立公園候補地を選び出している³⁹⁾。

この選定理由を見ると、山岳の風景地が選定されていたこと、その植物景観としては原生林と熱帯植物が注目を集めていたこと、そして観光地としての有望さへの言及があることが、すべての候補地に共通していることが認められる。また少なくとも大屯国立公園については、実際には内地と同じ選定基準が適用されてはいなかったことが想定される。なぜなら、「地域は広大でない」ことやその特徴が「本島唯一の火山として優に台湾に於ける独特の風景形式」であることが記されており、「我が国の風景を代表するに足る自然の大風景地たること」という国立公園の必要条件を満たしているとは考えにくいからである。

さらに、台湾の国立公園の特徴をより明らかにするために、昭和2(1927)年に台湾日日新報主催で選定された台湾八景と比較してみたい。台湾八景は、「埋もれたる風景美、知られざる名勝地を探索し汎く之を天下に紹介」し、「此麗はしき蓬莱島の中に真に麗はしき自然美を保つ名所として之を海の内外に宣伝」する事を目指し、「愛する台湾の爲めに、真に台湾を代表する名所を選定」したも

表1 日本における国立公園の選定基準

必要条件	
我が国の風景を代表するに足る自然の大風景地たること 即ち国民的興味を繋ぎ得て探勝者に対しては日常体験し難き感激を與ふるが如き傑出したる大風景にして海外に対しても誇示するに足り世界の観光客を誘致するの魅力を有するものたること 上述の条件に適合するものとしては左記に該当するものたるべし	
<ol style="list-style-type: none"> (1) 同一形式の風景を代表して傑出せること (2) 自然風景地にして其の区域広大なること (3) 地形地貌が雄大なるか或は風景が変化に富みて美なること 	
副次条件	
<ol style="list-style-type: none"> (1) 自然的素質が保健的にして多数の利用に適するものなること即ち空気、日光、気候、土地、水等の自然的素質が保健的にして多数の登山、探勝、散策、釣魚、温泉浴、野営、宿泊等の利用に適すること (2) 寺社仏閣、史跡、天然記念物、自然現象等教化上の資料に豊富なること (3) 土地所有関係が公園設置に便宜なること (4) 位置が公衆の利用上有利なること (5) 水力電気、農業、林業、牧畜、水産、鉱業等各種産業と風致との抵触少きこと (6) 既設公園的施設が国立公園計画上有効に利用せらるるものなると共に将来の開発容易にして国立公園事業の執行上便益多きこと 	

資料：台湾国立公園委員会編『第一回台湾国立公園委員会議事録』台湾国立公園委員会，1936，14-16頁。

表2 国立公園3候補地の概略と選定理由

公園名	概略と選定理由
大屯国立公園	約9,350ha（日本の国立公園中最小面積）。「地域は広大でないけれども本島唯一の火山として優に台湾に於ける独特の風景形式を有し勝つ利用上頗る有利である」。「隨所に原始林乃至自然林が保存せられて、固有の熱帯性植物景觀を呈している」。「諸所に温泉地、登山地、野營地等利用上有利なる地点がある」。「本島の最北端に位する高地であるから自から避暑地として適」する。「台北市に近接し台湾観光客をして必ず一遊せしむるに足るべく、位置竝に交通上最も有利なる条件を有する」。
次高タロコ国立公園	約257,090ha（日本の国立公園中最大面積）。「水成岩及變成岩系統に属する山地として特異の風景形式を備へ本島否日本の傑出せる代表的風景地と謂ふべくその山岳、溪谷、海岸等の風景に付ては世界的特色を誇り得る」。「隨所に広大な原始林又は自然林があり、よく下部熱帯より上部寒帯に至る林相の推移を指摘し得る」。「利用方法も探勝、登山、野營、釣魚、温泉浴等に限らるるも…長期の滞在にも適している」。
新高阿里山国立公園	約187,800ha。「日本の最高峰新高山を盟主とする水成岩系統の頗る雄渾を極むる山地であつて、本邦に傑出せる顯著なる風景形式を有する」。「本候補地と次高タロコ地域国立公園とは略同一の風景形式に属し互に伯仲する大風景地であるが、結局、地理、地形、地質、植物等の特徴に於て夫々特異点を有する」。「植物景觀に就ては、最も特色がある、即ち下部熱帯林に始まり一万尺の高地に達する寒帯林迄、各代表的林形を逐次展開」する。「登山、探勝、野營、温泉浴等の外特に高地に於ける避暑に適している」。「阿里山方面は観光地として相当の設備を有する」。

注：概略と選定理由の記述は、記載内容の主要部分を抜粋したものである。

資料：台湾国立公園委員会編『第一回台湾国立公園委員会議事録』台湾国立公園委員会，1936，16-21頁。

のであり⁴⁰⁾、選定方法は葉書等による一般投票に基づき、審査委員会の審議を経て決定されるものであった。一人何枚でも投票しても良いという条件であったため、359,634,906票もの数を集めたが⁴¹⁾、その選定は3対7の比率で審査委員の投票を重視するとされていた⁴²⁾。最終的に八景を決定した審査委員会は、交通局長を委員長とし、その他交通局を中心とした総督府の役人5名、大阪商船基隆支社長といった運輸交通関係を中心とした実業家4名、台北市内の高等学校を中心とする教育関係者3名、中央研究所から3名、総督府博物館から1名が出席し、「(1)台湾の景色として特色あること、(2)規模小ならざること、(3)交通の利便あること並に将来其の施設可能なること、(4)史蹟、天然記念物を考慮に置くこと、(5)全島に亘り地理的分布を考慮に置くこと」を審査基準にして、台湾神社と新高山をそれぞれ神域と霊峯として別格とし、八景として、八仙山、鷺鑾鼻、太魯閣峽、淡水、壽山、阿里山、基隆旭ヶ丘、日月潭を選定した(図1参照)⁴³⁾。

ここで選定された風景の特徴については、先の委員会にも出席していた中央研究所林業部長で林学博士の金平亮三が、淡水、基隆旭ヶ丘、壽山、鷺鑾鼻は海岸の風景地として、そして太魯閣峽は溪谷、日月潭は湖水、阿里山と八仙山は山嶽と森林美の風景地としてそれぞれ入選したと論じている⁴⁴⁾。内地で先に選定された日本八景⁴⁵⁾と異なり、台湾においては風景地を分類せず自由に選定したためこのように類似した地域が複数選ばれていたが、その結果、国立公園風景の特徴とされる「山岳、溪谷、森林」は別格の新高山を入れて4ヶ所のみしかなく、残りは海岸などの他の風景地となっていた。また投票段階の順位を見ると(図1参照)、新高山は54位とかなり得票数が少なく、1位の鷺鑾鼻がその百倍以上の得票数を獲得していた⁴⁶⁾。この台湾八景では、投票者が地元の風景地に投票すると

いう傾向がみられたが、少なくとも1位の鷺鑾鼻については、地元の高雄州の投票者数が台北州に次いで2位であったこと⁴⁷⁾、同州内の大都市である高雄市に近接する壽山が2番目に多いほぼ同数の票⁴⁸⁾を獲得していたこと、さらには投票した場所が八景に選ばれた際にもらえる景品の当選者に高雄州在住者と同数の台北市在住者がいたこと⁴⁹⁾などから、多くの住民が台湾を代表すると考える風景地であったことが認められる。一方の新高山は、当時の日本で一番標高が高い山であり、「皇徳の益々高きこと此の山の高きより高く」、「皇威を宣揚し奉らざる可けんや」⁵⁰⁾などと言われたナショナリズムと親和的な風景地であった。そのため審査委員会は、台湾在住の人々にはあまり支持されなかったにもかかわらず、そこを別格の霊峯として政治的に選び出したのだと考えられる。またこのような新高山の選定は、審査委員長をはじめ多くの台湾総督府の役人が参加していたことから、後の国立公園選定を視野に入れていた可能性もある。委員会に参加していた先の金平も、八景の中に新高山や阿里山、八仙山といった山岳的風景が選定されたことを評価し、そこが国立公園として相応しいことを論じている⁵¹⁾。

ここで台湾の国立公園と台湾八景を比較すると、台湾を代表すると考えられた風景地のうち、山岳地帯にあるものだけが国立公園に選出されていたことが明らかである(図1参照)。特に最も票を獲得した鷺鑾鼻が国立公園候補地から外れていること、そして新高山が国立公園の重要な要素として取りあげられていることから、台湾を代表する風景と日本を代表する風景が必ずしも同じではなかったことと、山岳的風景地のみが選定されたことが明らかである。また大屯国立公園については、台湾八景を1つも含んでおらず、それに次ぐものとして選定された台湾十二勝の草山北投が存在するだけであったため、先に言

及したように日本を代表する大風景であることも疑わしい上に、台湾を代表する風景としてもあまり考えられていなかったことが認められる。

Ⅲ. 台湾における国立公園候補地をめぐる論争

(1) 第一回台湾国立公園委員会における議論

昭和10(1935)年に台湾に台湾国立公園法が施行されると、「国立公園は台湾国立公園委員会の意見を聴き区域を定め台湾総督之を指定す」⁵²⁾と定められ、国立公園調査会は解散して台湾国立公園委員会が立ち上げられた。台湾国立公園委員会は、会長を台湾総督の中川健蔵、副会長を総務長官の平塚廣義とし、田村剛と内務局長の小濱淨鑛が委員と幹事を兼ね、その他27名の委員と10名の幹事によって構成されていた⁵³⁾。この委員のうち、台北帝国大学総長の幣原坦と7名の台湾総督府の役人が国立公園調査会の委員、2名の台湾総督府の役人が台湾八景選定委員であり、さらに昭和5(1930)年に台湾に史跡名勝天然記念物保存法が施行されたのに伴い設立された史跡名勝記念物調査会の委員から早坂一郎と日比野信一という2名の台北帝国大学教授が選出されていた⁵⁴⁾。また、本島人⁵⁵⁾は実業家の2名だけであり、当該委員会は内地人を中心とする委員によって組織されていたことが認められる。

第一回台湾国立公園委員会は昭和11(1936)年2月に開催され、台湾総督の中川が、国立公園設置の目的は「傑出して居ります所の自然の風景地を保護、開發致して国民の保健、衛生上に裨益すると共に情操の陶冶を図ること」と、「又一面国土の保全に資しますると共に進んでは外客を誘致して国際貸借の改善に貢献」することであると指摘し、なかでも「今日の如く挙国非常時に直面致して居る際に於きましては」、「国民の剛健なる精神と、健全なる体格を滋養」することが特に緊要であると感ずる、と宣言することから始まって

いる。続いて内務局長の小濱が、国立公園設置の経過を述べた後、第1号議案である「国立公園候補地決定に関する件」の審議を行うため、表1の国立公園の選定に関する条件と、表2の国立公園調査会が選定した候補地とその選定理由を説明している。

この国立公園調査会の提案に対して参加委員はいくつかの疑義を呈したが、候補地選定に関するものとしては、国立公園の数の削減を望むものがあつた。古生物学者であつた早坂一郎は、新高と次高タロコの2つの候補地が「似寄つた地域」でありまたその中間にこそ破壊されていない自然があるといい、この両者を1つにすべきだと提起している。さらに台湾新聞社長の松岡富雄は「台湾に一つの立派な国立公園を作る、台湾の誇りを誇り度い」とし、3ヶ所もつくるのではなく「他の追従を許さない一つの偉いものを作り度い」と発言している。また植物学を専門とする日比野信一もこれに同調し、1つの台湾国立公園を設定し大屯などをその特徴的な地点として紹介する方法を提案している。このような意見はその他の委員も概ね賛同しており、松岡は「此の三候補地に決定をして終つたと云ふ様な事は少し早計」ではないかと苦言を呈していた。これらに対し田村は、「国内的には一つの決つた一定の方針の下」で国立公園を設定する事を強調して「九州は大体台湾と似た様な面積であります、あそこに三つ」と、その数が適当であることを論じている。

また早坂は、台湾の国立公園は特異性を考えることが重要であり、内地から観光客を呼ぶためにも「台湾でなければ見られない所の風景、景観」を選定しなければならないと提起している。そして、「台湾に居ります者が暑い平地に居りまして山に憧れる」ためか、「台湾の特徴ある景観が平地にあると云ふ事を忘れて居る」ことを指摘した上で、台湾南方に位置する珊瑚礁が綺麗な鸞鑾鼻や広い大

地が特徴的な恒春半島一帯を、「熱帯台湾の地理的特徴である所の熱帯景観」が存在する地域だとし、そこを国立公園に含めることを提案している（図1参照）。また日比野も早坂の説に同調しつつ、恒春半島に熱帯降雨林に近いものが存在することを指摘し、そこが「熱帯的景観」によって「台湾的な最も特色のある所」であると論じている。このような意見に対して小濱は、「国民の剛健なる思想並に体育の増進」のため「内地に於きましても、割合に山が選定されて居る」のであって、「台湾が暑いから山が選定されて居ると云ふ訳」ではない、もちろん「山岳が涼しいと云ふ事」が考慮されているが、それならば3ヶ所に限られないと反論している。

加えて、この日比野の意見は、「単に雄大なる、傑出した、変化に富んだ風景地」を国立公園にするだけでなく、「世界的に貴重な天然物及天然現象と云ふものを十分に保護」しなければならないと強く主張した上でのものであり、台北帝国大学総長の幣原も彼に同意し、「他に余り類例の無いと云ふ様な特異性と云ふものを加へなければ何等深い意味を為さない」ため「国立公園と云ふものが、始めて考慮されました元の精神、即ち天然の有益物の保存といふものを考へて然る可き」だと述べている。しかしながら田村は、「国民の保健上非常に効果のあると云ふ様な大規模のものを擇ぶと云ふ様なのが、我が内地の国立公園の大体的方針」であるとし、「天然記念物或いは名勝地、或いは観光地」のようなものまでも含めるのではないと主張する。この田村の意見をうけて早坂は、学術的な価値ばかりでなく、恒春半島の台地を歩くことが身体の訓練にも役立ち、鷺鑾鼻が観光地として人気があるため、北海道では大雪山のようにその地域に特徴的な水河地形を国立公園にしているのだから台湾も熱帯的特徴を前面に出すべきではないかとさらに反論している。しかしながら、「特に反対の動議として成立

するもの」はない、と明確な説明もないまま台湾総督は黙殺し、原案通りの3候補地が決定されるに至っている。

以上の議論から、台湾における国立公園の地域選定に際しては、その数と場所、そして風景をめぐる、それが日本と台湾のどちらを代表するものなのかという問題を中心に、3候補地を選んだ台湾総督府の役人及びそれに関わった田村と、台北帝国大学の研究者や台湾在住の実業家などの他の委員との間で意見の対立が見られたことが確認される。この問題は、観光や自然保護、そして国民の心身涵養などについての考え方が交差するなかで、鷺鑾鼻を含む恒春半島一帯の熱帯的風景地も選ぶのか、それとも山岳的風景地ばかりを選ぶのかという点で特に顕著になっていた。また、候補地の決定に関しては、結果的には原案通り3ヶ所の山岳的風景地となったが、その選定理由も、台湾が暑いからではなく、内地において山が選定されているからとされたように、内地の基準がそのまま適応されたことになっていた。第一回台湾国立公園委員会においては、あくまで日本を代表する風景地として台湾の国立公園は選ばれたのであり、そのために、台湾のアイデンティティや気候、そして観光や自然保護といった観点は等閑視されたのである。

(2) 早坂一郎による国立公園候補地の選定に対する異議

こうした委員会での結論に対して、早坂はその後いくつかの批判を行っている。彼は、「国立公園候補地の選定に至るまでの行き方などに、種々の批評を免れがたいことがあつた」とし、「形式と伝統をかたくなに執つて進んだ点で、台湾の国立公園の、選定の事務的過失はないであらう。けれども学術的考究の足りなかつた点については、将来の国民からの非難や批評を甘んじて受くべきであらう」と、学術的な視点からみた問題点を指摘

する。特に、「日本帝国に於て台湾のもつとも特色とする熱帯的大自然景観が、各方面の学者達の極めて真摯な主張にも拘はらず、今日までまつたく考慮されるにいたらぬこと」を問題視し、「台東から屏東、高雄附近に達する緯度以南鷺鑾鼻に至る一帯の、真に熱帯的な一角の地域が、将来の国民のために保存せられ、かつ、一般民衆の行楽のために種々の施設を必要とすると云ふ、私の主張はその後、植物学、動物学の専門家達の側からも、その特殊相の故を以て、盛に声援されつつある。」⁵⁶⁾と、台湾南部一帯を国立公園化することによる自然の保存とその行楽のための利用が、台湾在住の内地人の研究者に支持されていたことを論じている。

ただし早坂も、昭和8(1933)年段階では内地の国立公園を検討するなかで、「我国の天下に誇るべき勝景の大部分が火山景観であると云ふ結論」を得て、そこから「我が台湾には内地に比を見ない水成岩(粘板岩及び砂岩等)から成る高山が多数ある」として山岳的風景の範疇における差異を発見し、「阿里山新高山」を第一に、次いで「タロコ峽」を国立公園に推していたことが確認できる⁵⁷⁾。こうした認識から、南部の熱帯的風景地への注目に転じた理由としては、彼の史蹟名勝天然記念物の調査活動が考えられる。内地においては、大正8(1919)年に史蹟名勝天然記念物法が制定されたが、台湾では、大正13(1924)年の台湾博物学会による「台湾史蹟名勝天然記念物保存に対する建議書」を受け、台湾総督府が昭和5(1930)年2月に史蹟名勝天然記念物保存法を施行した。そして、同年12月に任命された早坂を含む19人の史蹟名勝天然記念物調査会委員によってその選定作業が行われたのである⁵⁸⁾。特に天然記念物に関しては、昭和8(1933)年11月26日と昭和10(1935)年12月5日に合わせて12件指定され、そのうち台湾南部においては「毛柿及榕樹林」と「熱帯性海岸原生林」が後者の昭

和10(1935)年時に指定をうけている⁵⁹⁾。そしてこの時の調査成果と推察されるものが、昭和10(1935)年7月に台湾博物館協会の機関誌『科学の台湾』に「恒春特集号」として発表されており、そこで早坂は、「我国の最南端の突角であり、又我国最南の灯台所在地として有名な鷺鑾鼻は、よく人の訪れるところであり、その特殊な風景には常に人を驚嘆せしむるものがある」とし、その風景をなす地形として、「平坦な地盤」、「珊瑚礁」、「珊瑚礁石灰岩の洞窟」、「カルスト地形」を挙げている⁶⁰⁾。こうした活動から早坂は、「要するに、国立公園とは、私共の解釈するところでは、大自然を保存すると云ふことが主眼である」⁶¹⁾と諸外国の事例を批評した上で論じたように、国立公園の指定においても保存を重視するようになったのであり、また台湾南部地域の国立公園化を主張するようになったのだと考えられる。

ここで史蹟名勝天然記念物と国立公園の関係性を簡単に確認しておきたい。史蹟名勝天然記念物は観光と同じく国立公園の指定に密接に関連しており⁶²⁾、表1にある国立公園の選定基準の副次条件にも掲げられている。しかしながら、保存に重点を置く史蹟名勝天然記念物法の延長で国立公園を考えていたのは、内務省衛生局保健課と同じく大正9(1920)年から国立公園候補地調査を行っていた内務大臣官房地理課であり、そこは大正14(1925)年頃には史蹟名勝天然記念物の所管のみとなり国立公園選定事業からは手を引いていたとされる⁶³⁾。そして、国立公園事業は、内務省衛生局保健課に一本化されるが、その部署は国民の保健増進を目指す立場で国立公園の開発利用を志向していた。つまり、内地における戦前期の国立公園は、観光と国民の保健増進の問題が密接にからまりあい、開発に重点が置かれるなかで選定されたのである。

そして日本統治期台湾の国立公園選定にお

いても、国民の保健を考える内地の論理を持ち込んだ内務省衛生局嘱託の田村と、観光開発に主眼を置いていた内務局土木課によって国立公園候補地が選定されており、内務局地方課が管轄する史跡名勝天然記念物調査会の委員である早坂たちは候補地選定に実質的には関わることが出来ず、また第一回国立公園委員会における自然保護に力点を置いていた意見も完全に無視されてしまったのである。田村は同委員会直後の講演会において、国立公園の候補地が「山地に傾くから恒春、鷺鑾鼻方面の如き内地で見られないものを加へてはとの意見」があったと早坂たちの発言について言及しているが、「之は国立公園と云ふよりは学術的に史跡名勝天然記念物保存法に依つて解決出来るものと達観して居ります」⁶⁴と、国立公園と史跡名勝天然記念物を切り離すことによって、台湾南部地域の国立公園指定を否定していた。このように、田村と早坂の対立の背景には、開発や国民保健と、自然保存のどちらを重視するのかという問題があったのである。

また田村と早坂の意見の顕著な違いは、台湾における国立公園の風景が日本と台湾のどちらを代表するのかという点にもあり、これは空間スケールをめぐるポリティクスとして考えることができる。先の委員会後の論考において早坂は、「新高国立公園と、次高、タロコ国立公園との間」には「自然地理学的に著しい類似がある」ことを指摘してそこを一つにすべきだとし、また「火山国日本の台湾で、何を苦しんで大屯火山彙に火山景観の特徴を見出さうと苦心するのであらうか」と難じて「これを国立公園としなければならぬ理由を発見するに苦しむ」と論じ、かつ「ケッペンの分類において月平均気温18℃以上である恒春半島の周囲の平地のみが、眞の熱帯と呼ばれてよいもの」と述べて「我日本帝国領土内に於ける台湾の特殊的自然環境を全然無視して、眞に熱帯的な特徴を有つ恒春半島

付近を考慮しなかつたことは、国立公園調査会の不用意であつた」と批判していた⁶⁵。すなわち彼は、学術的な言説を用い、台湾という空間スケールを強調して、国立公園の候補地選定すべてを否定していたのである。

さらに彼は、「アメリカはアメリカ、何もアメリカやヨオロツパの真似をする必要はなからう、と云ふ議論は今日もつとも出さうな議論である。けれども、国立公園は、ただに自国民のみならず、遠く外国からも観光客を招かんことを理想として居る。故にその施設に当つては、よほど国際的に考を練る必要がある。」と、観光に注目するなかでグローバルな空間スケールでの思考も強調し、「国家の経営のみを高調してそれに依つて自を利せんとするが如き徒輩あらば、それ等は高尚な理想をもつ国立公園事業からは蹴落とされるべきものである」と、ナショナルなスケールでの思考を批判していた。また、「国立公園の選定の経緯の内に、地方開発を目的とする利権屋的臭気が多分にあるものとすれば」、「果して彼等の好んで云ふところの心身の修養、国民精神滋養の目的に副ひ得るや否や」と、地域の観光開発主導の国立公園選定が田村達の掲げる目的を減じることを指摘し、個別地域の空間スケールも批判していた。

このように早坂は、台湾もしくはグローバルな空間スケールを重視し、国家や個別地域という空間スケールにおける問題点を指摘するなかで、「今後に於いてでも、眞に台湾的な自然と人文とを保存し、かつ、将来の国民の身心の鍛練、趣味の涵養のために、充分の施設を行ふ国立公園の指定並びに事業を、台東附近以南の地域のためにも要求したい」と、「眞に台湾的」なる国立公園を主張したのである。一方の田村は、ナショナルな空間スケールを重視し、山岳的風景に代表される国立公園の選定を遂行するために、それに抗する言説を産み出す史跡名勝天然記念物法や観光をその基準から切り離し、台湾の独自性

を強調させる熱帯的風景の台湾南部地域の国立公園選定を否定したのだと考えられる。そして国立公園候補地に山岳的風景地のみが選出されることで、内務局長の小濱が第一回国立公園委員会の後に著した「国立公園の使命」と題した論考で⁶⁶⁾、「台湾の代表的風景の特徴は概ね山岳美」であると記したように、台湾を代表する風景も、台湾八景の人気投票でも早坂たちの主張においても注目された熱帯的風景ではなく、山岳的風景であるとされるようになっていったのである。

IV. 台湾における熱帯的風景と山岳的風景の心象地理

(1) 田村剛の熱帯的風景への注目とその変容

台湾南部の熱帯的風景地を国立公園に選定することを求めた早坂は、「恒春半島付近は、風景の美がないと云ふ論者がある。一体風景の美とは何であるか。ここに風景論をやるつもりはないが、少くも風景を観る人々の主観がかなりの部分を占めてゐることは否定出来ない。」⁶⁷⁾と、田村等の国立公園専門家の山岳的風景偏重のまなざしについても批判していた。しかしながら田村は、昭和3(1928)年の阿里山公園調査に関する旅行記『台湾の風景』において、以下のような思いを抱いて台湾に旅立ったことを記している。

嘗て渡米の途次ハワイに上陸して、その空、その海、その動植物、その他の風物悉くが、南国特有の強烈な光や色や香に濃く色付けられて、吾々の地上で想像し得る限りの、所謂パラダイスそのものを実現しているのを見た時、機会があつたら重ねて遊びに来たいものだと思ひ思つた事があつた。…私の推定する所に依ると、ハワイに酷似する気候風景等を有するものを我が領土内に求めるならば、それは正しく台湾島であらねばならぬ⁶⁸⁾。

このように田村は、ハワイを訪れた際に感じた南国のパラダイスというイメージを⁶⁹⁾、

「気候風景」の類似から台湾に投影していたのであり、実際に台湾に到着してからも、「何等かの特徴を有つた、調子はずれの、呆けた様な、何処までも奇抜な姿態」の熱帯的風景を構成する植物に注目している⁷⁰⁾。また彼は昭和3(1928)年に著した他の論考において、台湾は「随分風景地としては特色のある所で南部方面は南国の珍しい熱帯的の景観を有つて居ります」と、その風景の特色として「南部方面」の「熱帯的景観」を挙げ、そこが「日本の最南端を究めやうと云ふ人の好奇心に投ずるやうな一つの特色」なのだと指摘している⁷¹⁾。そして、昭和9(1934)年には「観光地としての台湾」と題した論考を発表し、以下のようにまとめている。

観光地としての台湾の最も重要な要素の一つは、夫が常夏の国であり而も内地及アジア大陸から孤立した一つの島であると云ふ点である。…凡そ旅行者は日常生活からかけ離れた異国的なる環境に抱かれる事に依つて無上の愉悅を感じるものである。内地人に対して台湾は全くエキゾチックなる島であつて、自然も人文も悉く内地にあつては想像だに及ばぬもので満たされて居る。かくして台湾は内地人に対しては太平洋の楽園ハワイと極めて類似した関係にある⁷²⁾。

彼は、観光地としての台湾の重要な要素として、楽園ハワイと類似した常夏の島と位置づけられることを挙げ、それがために「内地人に対して台湾は全くエキゾチックなる島」となることを論じている。このように、南国の心象を喚起する熱帯的風景を求めていた田村は、それを台湾の観光地化の重要な要素と考えたのであり、加えて「此の如き植物景観に抱かれて台湾の平地には非凡なる大風景地が随所に旅行者を待ち受けて居る」と、平地の大風景地に北投温泉、寿山、東海岸の大断崖と共に「本島の最南端の鸞鑾鼻」を挙げていた⁷³⁾。すなわち、実際には田村こそが、早坂

よりも早い段階で台湾の熱帯的風景に注目し、そこから観光地としての可能性を語っていたのであり、なかでも鸞鑾鼻に焦点をあてその魅力を論じていたのである。

さらに同論考において田村は、「観光地としての台湾は高山を有するが故に益々其の価値を加へる事となる」⁷⁴⁾と、熱帯的風景地と共に山岳地域にも注目していた。この両地域の関係は、観光地としての台湾とその文脈における阿里山の価値について論じた昭和5(1930)年発行の『阿里山風景調査書』において以下のように論じられている。

台湾の地は南国に位して併も位置高く夏季気候冷涼であるから、南方支方南洋地方等に対しては最も便利な位置にある唯一の避暑地といつてもよい。かくして熱帯又は之に近き南方地方の外国客を誘致すべく一大『ツーリスト』国を実現せしめるならば、台湾の経済上にも著大なる貢献をするであらう⁷⁵⁾。

ここから、観光地としての台湾の山岳地域とは、まず(亜)熱帯地域における気候の差異としてその価値が発見されていたことが認められる。そして山岳である阿里山の観光地としての内地からみた差異については、「内地の風景地の大部分を占める火成岩風景」ではなく「水成岩風景」であることと同時に、「内地のそれとは全く異り可なり熱帯的風趣に富む森林景観を認めることが出来る」などと、山岳に存在する熱帯的な風景に注目していた⁷⁶⁾。

また田村は、内地人にとっての台湾の魅力として、先の昭和9(1934)年の論考⁷⁷⁾において、自然に加え、「台湾の人文」もあることを指摘している。彼は「人種従つて風俗、習慣を全然異にする支那大陸系統の本島人、台湾土着の生蕃等が居て或は都邑をなし或は聚落をなし平地より高地に至る間特殊の文化景観を構成して居る」ことが台湾の景観の特徴であるとし、特に「台湾の風土に適した生

活を営」んでいる「深山幽谷を自が天地」とする「生蕃」に注目している。このように、「水成岩」と「熱帯的風趣」に「生蕃」が加わることで、内地人にとっての台湾山岳がさらに魅力あるものとして想定され、差異が強調されるなかで、そこは異種混淆の風景として認識されていたのである。

そして、こうした観光客のまなざしから差異を求める田村は、「内地の観光客の立場からすれば台湾に来たからには台湾固有のものに接し度いのが万人の慾求であるに相違ない」として、「風景地の開発利用に付ては其の土地の自然と人文とを夫に依つて破壊しないように計画しなければならぬ」と論じ、「特に風景地の内地化、洋風化等に就いて細心の注意を払つて欲しい」と、近代的な観光開発に注意を促していた⁷⁸⁾。そのため、「台湾の風景施設としては成可く台湾の風景と人文とて其の純粹の姿で保存する事が最大なる要件」となり、「此の如き特色を亡ぼさんとする傾向が有る」[拓殖計画]から観光地を守るために、「国立公園州立公園都市公園等の施設」や「学術上貴重なる地域物件は史蹟名勝天然記念物保存法」によって保存を遂行するべきだと主張した⁷⁹⁾。このように田村は、熱帯的風景や観光に注目するなかで、台湾の独自性の重要性を訴え、その保存のために国立公園をはじめとする諸制度の活用を考えていたのであり、まさに早坂と同じ主張をより早い段階で行っていたといえる。

ただし、田村の国立公園と観光との関係性についての捉え方は、昭和3(1928)年の阿里山調査時と、昭和9(1934)年の観光地としての台湾を語った時では、異なるものになっていたと考えられる。彼は阿里山調査時においては、国立公園とは「官庁の力」ばかりでなく、「地方民間有志の力を借り協力」しなければならないと述べると同時に、「国立公園の要素としては第一に驚くべき偉大なる優れた大風景地であること、第二に永遠に

天然のまま保存し得られること、第三には誰にも広く利用し得られること」と、大風景、保存、利用を説くのみで国家的であることは全く指摘しておらず⁸⁰⁾、当時は盛んに阿里山の観光地としての価値を論じていた。ところが田村は、昭和5(1930)年には雑誌『国立公園』において、国立公園とは「国家的利害を有するものであつて、決して地方的利害関係により左右せらるべきものではない」とし、「その風景を保護し開発する目標は、国民の享用、観察、研究等のためである。外客誘致の如きは第二次的な副産物であり、一地方の経済を発展せしめるが如きは第三次的なものとしてよろしい。」と、外客誘致や観光による地方開発を副次的なものとし、国家的であること、国民のためであることを強調するようになっていたのである⁸¹⁾。そして、昭和10(1935)年時に台湾に訪れた際には、「国立公園は自然の大風景を保存、保護致しまして、さうして国民の保健、休養、教化に資すると云ふのが、国立公園の大体の定義」であり、「日本で国立公園運動が起りました時に、大蔵省関係とか或は議会の於ける政府の答弁等から、外客誘致が可なり高調されたのであります」が、「国民の為の公園でありまして、外客誘致を主目的とするのではない」と説明するようになっていた⁸²⁾。

その後の田村は、先述したように、第一回台湾国立公園委員会において、国家における均質な基準を強調して国立公園の観光地としての価値を否定し、それによって山岳的風景地のみを選び出し、委員会後に鷺巒鼻附近は史跡名勝天然記念物として指定すればよいと発言している。彼はさらに、昭和11(1936)年7月発行の雑誌『台湾の山林』の「台湾国立公園号」に、「台湾国立公園の使命」と題した論文を寄稿し、以下のように論じている。

内地とその気候風土を全然異にする台湾に於て、特異なる風景地はこれを求めることは

容易であるけれども若し傑出してゐるものがないとすればそれは遂に国立公園と為すの必要を認めぬのである。

重点は我が国民をして大自然に接して雄渾なる気宇を養はしめ強健なる身体を練へしむるに在る。殊に台湾の平地に在住する者は気候の関係上心身共にややもすれば遅緩して生氣と活氣とを失ひ勝ちである。冷涼なる高地に転地して心身を休養せしめ、雄大豪壯なる風景に接して氣象を壮大にすることは寸時も怠つてはならぬ所と思はれる。世間動もすれば国立公園と観光地を混同しがちであるが、これは重大なる誤解である。国立公園は最も健全なる休養地であり、最も完備せる野外の運動場であり、それは最も神聖なる精神修養の靈域である。かうした施設が植民地と謂はれる台湾在住者にとつて、極めて適切なるは多言を要せぬ所である。⁸³⁾

田村はここで、平地の熱帯的な風景地を、「傑出」しておらず単に他性を喚起する「特異なる風景地」あることを論じると同時に、そこが在住者を「心身共にややもすれば遅緩して生氣と活氣とを失ひ勝ち」にさせることを指摘している。すなわち熱帯的風景地とは、観光客を惹き付ける特異なる他性の地であり、かつ日本を代表するのにふさわしくない悪環境の地でもあるという、アンビバレントな他所として認識されたのである。そして国立公園が「国民をして大自然に接して雄渾なる気宇を養はしめ強健なる身体を練へ」る地であるとする田村は、観光地であることを否定することで「特異なる風景地」たる熱帯的な平地をそこから排除し、かつ悪環境の平地との対比を強調するなかで「冷涼なる高地」を「心身を休養」と「雄大豪壯なる風景」の地とし、そこを「健全なる休養地」、「野外の運動場」、「神聖なる精神修養の靈域」とする国立公園に位置づけたのである。

ここでの山岳の意味づけは、「植民地と謂はれる台湾在住者」に注目し、かつ台湾とい

う空間スケール内での差異に注目したものであり、昭和5(1930)年発行の『阿里山風景調査書』において、「阿里山風景の経営は単に台湾住民に対する公園たるに甘んぜず、世界的風景地、休養地を大成するの覚悟を以て臨まなくてはならない」⁸⁴⁾と述べていたのと正反対になっているのは勿論のこと、国家おける均質な基準を強調した委員会における論理とも符合しないものであった。このように田村は、第一回台湾国立公園委員会の後に、台湾における山岳の意味に注目し、熱帯的風景地の心象地理に悪環境としての認識を加え、台湾在住者の心身の問題を台湾の国立公園の意義に加えていったのである。

(2) 植民地住民の心身と山岳的風景の心象地理

田村の言及した台湾の平地における熱帯の悪環境に対する認識は、当時しばしば言及されたものであり、そこには白人の熱帯環境における心身の退廃についてハンチントン(Huntington, E.)⁸⁵⁾が論じたような、環境決定論の影響があったことが認められる。例えば、早坂と同じ台北帝国大学の地質学教室に所属し人文地理学を専門としていた富田芳郎は、「植民地としての台湾」と題した論考において、「熱帯であると、その気候の暑いといふことが人類の精神活動の上の障害」になること、そして「白人は熱帯の暑い気候に対しては抵抗力が弱い」ことや「熱帯の原住民はその文化の程度が低いままに進歩発達を見ずに今日に至つた」ことを指摘し、「台湾は日本人が熱帯の植民事業に於いて実際にその事業に耐えうるか否かを試す試験場」であると論じている⁸⁶⁾。こうした点について、台湾を紹介する書籍でも、先のハンチントンの著書を紹介して「とに角、熱帯的気候なる者は、人様の人相をばブチ壊す位に身体の健康上の賊である」と論じるなかで、その環境の有する問題点を指摘している⁸⁷⁾。

一方、台湾の山岳は、大部分が「蕃人」が占有する「蕃地」で、そこは警察管理下で国有の特別行政地域であり、警察の発行する入蕃許可書なしでは一般人が立ち入れない地域であった⁸⁸⁾。そしてこの蕃地では、明治43(1910)年にはじまる5ヶ年計画理蕃事業が完了するまで、「蕃害」と呼ばれた蕃人による内地人の殺傷事件が頻繁に起きており、「首狩りの里」⁸⁹⁾などと呼ばれる恐怖の感情を喚起する場所となっていた。青木⁹⁰⁾の調べによれば、大正元(1912)年からの5年間で平均297人、その後5年間で平均81人、その6年後の昭和2(1927)年までで平均7人が蕃害で死亡しており、彼はそこに至ってようやく「最近蕃人は首を取らない」と述べている。そのため、台湾における登山もこの蕃害とそれに伴う山地開発の遅れのため実質的には大正10(1921)年以降に開始され⁹¹⁾、台湾山岳会が設立されたのも大正15(1926)年になってからであった。国立公園の議論も勃興した台湾八景の選定時は、まさにようやく山岳地帯に観光地としての可能性が開かれた時期だったのである。特に、台湾総督府による伐木地としての開発が順調に進んだ阿里山には、大正15(1926)年に1,639人、昭和2(1927)年に3,246人の観光客が訪れ⁹²⁾、また台湾八景に選定された後の昭和3(1928)年には入蕃許可証が廃止されるなど⁹³⁾、政策的にも観光地化が推し進められていった。

そして大正15(1926)年に青木が、「阿里山に内地人を其の官吏と民間とを問はず、せめて酷暑中強制的に追ひ上げること」を提唱し、それにより「内地人の精神と肉体の湾化、防止」を図ることを台湾総督府に求めたように⁹⁴⁾、阿里山は平地から逃れて湾化⁹⁵⁾を防ぐための避暑地として位置づけられるようになった。昭和10(1935)年発行のある阿里山の紀行文で、「宿の女中達は林檎の如く健康な頬を輝かしてゐる。台湾特有の風土色を帯びないのはこの高層生活の然らしむる所

で平地に下れば当初は健康を害し次第に土色に変わるといふことである。』⁹⁶⁾と著されていたが、こうした記述は当時非常に多く、熱帯の悪環境から逃れる避暑地としての認識は広く共有されていたと考えられる。

そしてこの悪環境の平地からの逃避場という意味では、台北市に近接していた大屯山一帯が、北投と草山という2つの温泉地の発達を背景に早くから開発され、かつ重要な意味を持っていた。北投は、明治29(1896)年の旅館創設以降、大正2(1913)年に公共浴場が新設されるなど漸次開発がすすめられ、大正5(1916)年に新北投駅が創設されて台北市内からの交通が便利になると、「本島に於ける遊覧地としてその右に出づるものなし」と言われるようになっていた温泉地であった⁹⁷⁾。また草山も、大正2(1913)年の公共浴場設置以降、大正9(1920)年には遊園地計画が樹立されて北投へ接続する道路が建設されており、昭和4(1929)年度で8,284人の旅客を集める温泉地となっていた⁹⁸⁾。これら両地の存在を背景に、昭和2(1927)年に金平亮三は「台湾は熱帯地であるから海拔を利用して庶民が行楽の出来得るところが是非欲しいと思ふ」⁹⁹⁾と指摘し、大屯山一帯の国立公園指定が望ましい旨を述べたのである。また本多は昭和4(1929)年に発表した大屯山の公園計画において、「台北市の如き熱帯地にありては常に心を用いて肉体の健康維持と精神の緊張確保とに力を致さざれば遂ひには其の湿潤なる苦熱に圧倒されて安逸遊情に流れ心身共に疲弊するの虞あり。されば當大屯山山麓の如き山間涼冷の地を選びて時に暑を此処に避け英気を養ひて心身の退化を防がんとするは誠に其當を得たるものと、其の達見に賛嘆の辞を惜まざるものなり。』¹⁰⁰⁾と、熱帯の悪環境から逃れ、心身の退化を防ぐ地としての山岳の価値を具体的に指摘し、同じくこの地の国立公園としての可能性についても言及していた。実際に国立公園調査会において

も、「台湾は空気、日光、暑熱といふ点に於て内地とは異なる事情がある此の酷熱の地では国立公園の如きその計画は冷味を加へる事は特に必要である、外客誘致といふ事も重要な事だが、又一面島民の保健上の考慮をもなすべきであり万人向きの手近なところで国立公園を選定する事は最も意義が深い」という意見を財務局長が述べ、それが「一同の注意を惹」いたとあることから¹⁰¹⁾、選定理由には公には書かれていなかったものの、(亜)熱帯地方における大都市に近接した山岳であったことが、大屯の国立公園候補地選定の大きな理由になったのだと考えられる。

台湾における山岳の風景は、そこが内地と類似した場所であり、内地人にとって母国への郷愁を喚起させる事もしばしば指摘されていた。この点について、田村が昭和3(1928)年に、「大屯山は云ふ迄もなく台湾に於ける唯一の火山であつて、内地では到るところ火山的風景が多いが、台湾ではこの種のものが少ない。若し内地人が内地に対する何等かの憧憬をもつて、大屯山にお出になると、内地に於ける風景美を想ひ出されることと思はれる。』¹⁰²⁾と、大屯のそうした特徴について言及している。阿里山についても、例えば台湾日日新報社主筆の大澤貞吉が「阿里山が内地の気候や風土と相似る所多く、その山川草木の情趣等自づから内地の自然を想起させ、一段と懐かしさの情をも増させる」¹⁰³⁾などと記したように、同じような指摘がしばしばなされていた。この点については、特に桜の植樹において顕在化しており、阿里山においては、大正元(1912)年頃に嘉義市の遊廓内に「内地気分」を喚起するため植えられていた「内地桜」が移植されて以降¹⁰⁴⁾、大正7(1918)年には阿里山在住者の献金により900本、昭和3(1928)年には嘉義商工会が486本植樹するなど順次「内地桜」の植樹が行われ¹⁰⁵⁾、昭和9(1934)年には「三月下旬と言へば阿里山一帯爛漫たる櫻花に包まれ、母国の春を

偲ぶに十分に例年続々と観櫻登山客が多数訪れて僻陬の山地にも時ならぬ賑やひを呈する」¹⁰⁶⁾と伝えられるまでになっていた。当時、「湾製」と呼ばれた台湾で生まれた二世代の内地人も本島人もあまり山へ登らないことがしばしば指摘されていたが¹⁰⁷⁾、その背景には、このような母国への郷愁の有無があったと考えられる。

そしてこの内地的なる山岳的風景地は、日本人としてのナショナリズムの感情を刺激する審美的で政治的な空間になっていたことも確認される。こうした山岳認識は、例えば青木が昭和3(1928)年に、「四季の変化の面白味が無くて常夏なる実質を備へる」台湾の平地ではなく、「日本最高新高山を中心として、海洋中に浮んでゐる台湾の姿を望めることを、我々は常に忘れてはならぬ」と提言し、山に旅することで、「秀偉なる、風趣ある日本人たる国民性が涵養される」として、「殺風景なところのみ台湾を見る勿れ、垂直的台湾に、到るところ秀偉なる風景がある」¹⁰⁸⁾と論じていたことに認められる。ここで彼は、「日本最高新高山」を台湾の中心に位置づけているが、Ⅱ章(2)で言及したように、そこは天皇崇拜、帝国主義礼讃の象徴的な場所と当時考えられていた。なかでも、新高山山頂において日の出を眺める時がその最高の瞬間とされ、ある紀行文では「一同狂気して絶頂に集り、誰が云ひ出すともなく声を合はせ、東方遥拝、宮城遥拝、戦地敬礼、天皇陛下万歳、君が代の合唱と移つて行く」と、その時空でナショナリズムの感情が強く刺激されたことを記している¹⁰⁹⁾。そして新高山方面に昇るご来光が眺められる阿里山の祝山は、そこで「新高山、其の霊峰からの御来光」をみて「神々しさにぬかづかせられ」、その「蛤形の山頂が雲海に浮き出された姿」に「神の国を仰ぎ見る心地」がしたなどと述べられていたように¹¹⁰⁾、山岳的風景地のなかでも神国としての日本を感じる事ができる重要

な場所となっていたのである。

先に青木が台湾住人の「湾化」防止のために阿里山の活用を説いていたことを指摘したが、この湾化とは当時、「恐る可きは環境の感化だ。内地人の台湾生活者が、いつの間にか湾化して、反日本的言動に及んでも恥ぢとしない。」¹¹¹⁾などと言われたように、単なる精神的・肉体的な退廃だけではなく、内地人が台湾で政治的にも非日本化する現象として考えられていた。そのため、平地の熱帯的風景地は、青木のように「殺風景」などにより一層忌避すべき対象とされたのだと考えられる。そして、この熱帯的風景地との対比によって、「日本人たる国民性」を涵養するという政治的な目的のために、山岳的風景地が「秀偉なる風景」とされ、重要な地と位置付けられる傾向が強まったのである。このような背景から、昭和9(1934)年には「桜花が、我が国民精神を養ふに偉大なる力」があるため、「台湾に於ける国民的情操陶冶」をなし、「内地延長所謂同化の実を挙げ」るために台湾における桜の植樹が必要であると提言されるようになり¹¹²⁾、「凡そ大和桜とは似てもつかぬ台湾桜」ではなく、「『敷島の和心』を培う」「日本桜、内地桜」の植樹が提唱され、「社会教化の事業」の一環として「阿里山一帯を桜花で包むこと」、そしてそれによってこそ「同地は名実相伴ふ国立公園」になると言われるようになったのである¹¹³⁾。

以上から、台湾における山岳的風景地は、「日本的」なる地と位置づけられ、悪環境の熱帯的風景地で生活する住民を、心身共に健康にすると同時に日本人化させるという帝国主義的な目的のために重要であったことがわかる。そしてこうした認識は、上述のように、台湾の国立公園に関する議論においても盛んに取り上げられ、国立公園調査会における候補地選定や、第一回台湾国立公園委員会後の田村による台湾の国立公園に対する意義付けに大きな影響を与えたのである。これら

をうけて、国立公園選定後に内務局長の出口一重が昭和13（1938）年に発表した「台湾の国立公園制度とその使命」では、「台湾の平地を見るに、熱帯と亜熱帯に属して、その風土気候は動もすれば肉体より健康を蝕み、精神よりは緊張を奪ひ勝なのである。之に対しては習慣又は夏期等の休暇を利用して自然の懐に入つて身心の休養を心掛け、或は登山野営等により質実剛健の気風を涵養し、以て滅私奉公の覚悟の具現化に精進するの要がある。」¹¹⁴⁾と、平地の悪環境からの逃避と心身の日本人化が明確に台湾の国立公園の意義に加えられている。

ただし出口はこの文章の末尾に、「台湾の国立公園は、我国唯一の多彩な熱帯地の国立公園で、その観光的興味も深く且又観光地理に恵まれて居る等の点を利用して、今後国内の観光系統と結びつけ、或は更に亜欧満鮮等の国際観光の系統にも織込ましめて、極東に於ける最も有力な国際的観光地帯たらしめ」ることについても論じており、熱帯的風景地の魅力も観光の文脈においては強調されていた。さらに国策としての南進論が昭和11（1936）年頃にはじまり昭和15（1940）年頃に本格化するなかで¹¹⁵⁾、「南」が政治的にも意味を持つようになってくると、田村も昭和13（1938）年には「由来島帝国日本は、特に南に向つて発展すべき運命に置かれてある。熱帯地方に於ける国立公園を、その公園系統に加へることは、極めて緊要である。」¹¹⁶⁾と、台湾の国立公園の説明に際して南の熱帯地方であることの重要性について言及するようになっていた。

こうした変化を象徴するものに切手の図案があり、大正12（1923）年に台湾で最初に発行された「皇太子殿台湾行啓記念切手」は「図案には霊峰新高」が配された「本邦最初の山岳切手」であったが、第2番目の昭和14（1939）年に発行された6銭切手は「南海を睨んで立つ鷺巒鼻灯台を配し帝国南方進展の精神を象徴したもの」¹¹⁷⁾となっていた。その

後、昭和16（1941）年には、大屯2種類、新高阿里山2種類、次高タロコ4種類の計8枚からなる台湾国立公園切手が発行されている。これは、3ヶ所の台湾における国立公園を指定した昭和12（1937）年の第二回台湾国立公園委員会で提起され、台湾総督の賛同も得て推進された事業で、昭和13（1938）年には台湾の各国立公園協会が連名で、国立公園を「国民の保健休養教化に資するのみならず、観光事業を完成し、本島の実情を紹介」することに活用するためその発行を総督府に陳情した、観光振興への地元の期待が込められたものであった¹¹⁸⁾。実際の発行にあたっては、「南進日本の前進基地、我が台湾の力強い存在を一億同胞の眼に訴へ且つは聖戰五年世界新秩序を目指し暮進しつつある皇国日本の文化的美術的方面に於ける余裕ある一面を如実に全世界に伝へんもの」¹¹⁹⁾と、南進の政治的意義が強調されたものとなっていた。このような状況を背景に、「暖国台湾を表はす植物景観が一枚位あつてもよい」¹²⁰⁾という理由で、「大屯山の遠景と前面に在る林投の群落は如何にも暖国台湾的な風景」¹²¹⁾とされた大屯国立公園切手の図案が出来上がり、それは「林投の方が寧ろ主役で、山の方は従位にしかなつてゐない」ため「台湾在住の我等から見て、一番無意味と思はれる」が、「内地に居る人から見れば林投のとげとげしい風姿が、何となく台湾を象徴する熱帯植物であるかに見へて、結局通信省当局の目を惹いたのであろうと想像される」¹²²⁾などと批判され物議をかもしたものであった。このように、熱帯的風景が、観光客のまなざしと南進論が絡まり合う中で、国立公園指定後に再度その風景として注目を集めるという状況が生じていたのであり、台湾の山岳は異種混淆の風景地として提示されていたのである。

V. おわりに

本稿で明らかになったことをまとめると以

下ようになる。

①台湾における国立公園候補地の選定は、内地と同じく初期においては特定の地域の観光開発が大きな影響を与えており、またそれは内地における国立公園選定の基準が導入されるなかで、山岳的風景地が選出されていたことが認められた。このように台湾における国立公園候補地の選定は、基本的には内地のその延長線上であったと考えられるが、大風景地とは言い切れない大屯国立公園を候補地にするという、内地とは異なる基準での選定もなされていた。また、台湾八景と国立公園候補地との比較検討から、山岳的風景地がナショナリズムと親和的である一方で、それが台湾を代表すると台湾住民が考える風景地ではなかったことも認められた。

②こうしたひずみの一端は、台湾における国立公園の候補地を決定する第一回国立公園委員会における議論において顕在化した。ここでは、台湾在住の知識人から、観光客誘致や自然保護と関係づけつつ、台湾の地域アイデンティティの主張がなされ、特に台湾南部の熱帯的風景地の国立公園化が求められることになった。しかしながら、日本というナショナルな空間スケールが強調されるなかで、これらの主張は取り入れられる事はなく、田村によって観光や自然保護の重要性が否定されることになった。

③また、台湾における山岳は、それが(亜)熱帯地域に位置する植民地に存在していたがために、内地のそれとは異なる意味が付与されていたことが明らかになった。そこは、当時の環境決定論の思想による熱帯的環境による人種的廃退の考えや、母国である内地への憧れが関係するなかで、ナショナリズムの感情を刺激すると同時に身体日本人化を図ることができる審美的で政治的な空間として考えられていたことが確認された。そしてこうした理由から、大風景地とは言い切れない規模の小さい大屯が、内地的な火山風景であり

かつ大都市である台北市に近いがために、国立公園に選定されたことが判明した。

④熱帯的風景地に対する心象地理は、樂園としてのそれを専ら語っていたのは初期においては田村であり、また彼はそうした観光客のまなざしで台湾の観光地としての可能性を論じてもいた。それは、(亜)熱帯の悪環境を論じた本多とは正反対の認識であったが、これらはともにステレオタイプ化された他所表象には変わりがなかった。そのため田村は、熱帯的風景地のみでの国立公園選定には反対し、ホームたる日本の真正性を喚起する国立公園の風景として山岳を選定したのであり、熱帯的風景は、混淆物として山岳的風景地の国立公園に他性をもたらすものという認識を越えることはなかった。また国立公園選定の過程において、熱帯ではなく山岳としての台湾の表象が優位になっていったが、戦時体制期の南進という社会状況において、再度、熱帯的風景の喚起する南の心象地理が評価される機運が生じていたことも確認された。

⑤田村が、早坂の意見に反対するために観光の重要性を否定せざるをえなかったのは、他性を求める観光客のまなざしが、特定の空間スケールに依存しないがためだと考えられた。すなわち、観光を強調することは、資本主義的な地域発達を論じるために重要である一方で、ナショナルな空間スケールを融解させる可能性も有していたため問題含みだったのである。しかしながら、観光という視点は、国立公園候補地選定から選定後まで、ほぼ継続的に重要な一要素ではあり続けていたため、アイデンティティの中心とされる山岳的風景地の国立公園において、熱帯的風景や原住民などが他性を喚起するものとして注目され、そこは常に異種混淆の風景として認識される傾向があったことが認められた。

⑥日本統治期台湾における国立公園選定の過程を検討した結果、上述のように国立公園(候補地)の風景への意味づけが変化し続け

ていたことが認められた。これは、国立公園という空間が有する両義性や矛盾、そして社会的文脈の変化を背景としながら、アイデンティティ、観光、心象地理、感情、政治などの関係性とその内容が変容し続ける中で生じたものであり、それは特に台湾における国立公園選定に深く関与した田村による認識の変容に如実にあらわれていた。さらに、同時期にあってもその関係性や意味づけに対する考え方は、そのポジショナリティによって多様であり、台湾の国立公園の選定における諸関係は、動的に変容すると同時に、極めて重層的なものであることが明らかになった。

なお、戦前期において国立公園に指定されなかった台湾南部の鸞鑾鼻一帯は、台湾政府が最初に指定した国家公園の墾丁国家公園として1982年に指定されている。こうした、植民地統治期以後の台湾政府による国家公園指定と、それ以前の日本政府による国立公園指定との関係性を、本稿のような視点から検討することで、台湾における国立（国家）公園の風景地選定をめぐるより動態的な過程を描き出すことが出来ると考えられる。また、本稿における考察は、主として日本語で内地人によって記された資料に基づいていたため、当時の漢民族や少数民族の国立公園や自然風景に対する考え方や感情については検討することができなかった。さらに本稿では、同じく植民地における国立公園の候補地になっていた金剛山をはじめとする、他の国立公園候補地との相互関係に関する詳細な考察は行っていない。以上の点を今後の課題として稿を閉じることにしたい。

(和歌山大学観光学部)

〔附記〕

本稿は2005年3月に大阪市立大学大学院文学研究科に提出した博士論文『近代日本における観光空間の生産をめぐる文化地理学的研究』の第3章を加筆・修正したものである。また、本稿

の骨子は「日本統治期の台湾における国立公園地域の選定過程と心象地理」と題して、2003年10月に開催された日本地理学会秋季学術大会・観光地理学研究グループ研究例会（於：岡山大学）において発表した。なお、本稿の補足調査にあたり、平成19～21年度 科学研究費補助金・若手研究(B)「日本における国立公園の風景地選定とナショナリズム・観光・自然保護の関係性」（代表・神田孝治）を利用した。

〔注〕

- 1) 荒山正彦「文化のオーセンティシティと国立公園の成立—観光現象を対象とした人文地理学研究の課題—」地理学評論68A-12, 1995, 792-810頁。
- 2) 荒山正彦「自然の風景地へのまなざし—国立公園の理念と候補地—」（荒山正彦・大城直樹編『空間から場所へ—地理学的想像力の探求』古今書院, 1998）128-142頁。
- 3) ジョン・アーリ著、加太宏邦訳『観光のまなざし—現代社会におけるレジャーと旅行—』法政大学出版局, 1995, 1-27頁。
- 4) アンリ・ルフェーブル著、齊藤日出治訳『空間の生産』青木書店, 2000, 425-572頁。
- 5) このような研究動向については、吉原直樹の著書（『モビリティと場所—21世紀都市空間の転回—』東京大学出版会, 2008, 17-38頁）にまとめられている。
- 6) この段落で紹介する文化論的転回以降の人文地理学における研究動向については、以下の文献を参考にした。森 正人「言葉と物—英語圏人文地理学における文化論的転回以後の展開—」人文地理61-1, 2009, 1-22頁。ベン・アンダーソン、ディヴィア・トリア＝ケリー著、森 正人訳「社会・文化地理学における物質／問題」空間・社会・地理思想11, 2007, 83-89頁。ナイジェル・スリフト著、森 正人訳「感情の強度—情動の空間的政治学にむけて—」空間・社会・地理思想11, 2007, 58-82頁。シェリル・マッイワン著、森 正人訳「物質の地理学とポストコロニアリズム」空間・社会・地理思想 11, 2007, 44-57頁。
- 7) 前掲2) 141頁参照。

- 8) この点については、以下の拙稿で指摘した。なおこれらの研究においては、日本統治期台湾における国立公園指定で生じた議論を簡単に検討しただけであり、本稿のような詳細な考察は行っていない。Koji, K., "Landscapes of national parks in Taiwan under the Japanese colonial period" in Toshio, M., eds., *Representing Local Places and Raising Voices From Below*, Osaka City University: Department of Geography, 2003, pp.112-119. 神田孝治「日本統治期の台湾における観光と心象地理」東アジア研究36, 2003, 115-135頁。神田孝治「観光客のまなざしと近代リゾート」(遠藤英樹・堀野正人編著『観光のまなざし』の転回—越境する観光学—』春風社, 2004) 67-82頁。
- 9) エドワード・W. サイド著、今沢紀子訳『オリエンタリズム』平凡社, 1986。
- 10) 前掲9) 54頁。
- 11) 代表的なものとして、Duncan, J. and Gregory, D., eds., *Writings of Passage: Reading travel writing*, Routledge, 1999. がある。
- 12) こうした研究を行うにあたって、19世紀のイギリス人を中心としたヨーロッパ人の旅行者たちによる、イギリス植民地のスリランカのキャンディ高地への、ロマンティックな心象地理の投影について論じたダンカン (Duncan, J.) の論考 ("Dis-Oriente: On the shock of the familiar in a far-away place" in Duncan, J. and D. Gregory, eds., *Writings of Passage: Reading travel writing*, Routledge, 1999, pp. 151-163.) は非常に参考になる。その研究において彼は、キャンディ高地には、衰退・荒廃・欠如のロマンティックなイメージを伴ったオリエンタルなものと、ピクチャレスクな光景の探索において旅行者たちに愛されている高山ヨーロッパ、という2つのイメージがヨーロッパ人によって投影され、その他性と不思議な親しみの異種混雑性によって彼／彼女たちに好まれたことを論じている。さらに退廃のオリエンタルの美学は熱帯における白人の人種の墮落の環境決定論と繋がっており、熱帯地方がもたらすヨーロッパ人への身体的ダメージから幾分か逃れうるということがキャンディ高地の魅力となっていたことが指摘されている。この議論における、熱帯の植民地にある山岳は、他性の心象が魅力の一側面を有し、また遠方だからこそホームたる心象が意味を持ち、さらに熱帯についての環境決定論的認識がために山岳の魅力が生じていたということは、本稿の事例の検討に際して大きな示唆を与えてくれる。(亜)熱帯地域に位置する台湾の国立公園について検討する際には、熱帯的風景と山岳的風景の心象地理に注目しなければ理解できない部分が存在するのである。
- 13) 本稿で取り上げる日本統治期台湾の国立公園については、いくつかの研究でその事実が取り上げられているが、それを主たるテーマとして取り上げたものとしては、管見の限り下記のものがある。しかしながら、これらの研究においては、日本統治期に国立公園が選定された過程を紹介しているが、事実確認の面でも不十分な点が多く、また本稿のように風景や心象地理の問題に注目して検討したものはない。なお、日本統治期台湾の国立公園に関する一時資料は、雑誌「国立公園」をはじめとする国立公園関係資料ばかりでなく、その他各種雑誌や新聞における記事など幅広く存在している。本稿ではこれらすべての資料を用いているが、特に国立公園関係以外の各種雑誌や新聞における記事、および台湾の国立公園に関連する行政資料については、主として国立中央図書館台湾分館に所蔵されている旧台湾総督府図書館資料および国立台湾大学図書館に所蔵されている日本統治期資料を渉猟して得られたものに依拠した。劉東啓・油井正昭「第二次世界大戦以前における台湾国立公園の成立に関する研究」ランドスケープ研究63-5, 2000, 375-378頁。黄躍雯『台湾国家公园建制過程之研究』国立台湾大学地理学研究所博士論文, 1998, 41-62頁。
- 14) 丸山 宏『近代日本公園史の研究』思文閣出版, 1994, 269-375頁。村串仁三郎『国立公園成立史の研究—開発と自然保護の確執

- を中心に一』法政大学出版局，2005，1-139頁。なお，指定された12ヶ所の国立公園は，阿寒，大雪山，十和田，日光，富士箱根，中部山岳，吉野熊野，大山，瀬戸内海，阿蘇，雲仙，霧島である。
- 15) 田中正大『日本の自然公園—自然保護と風景保護—』相模選書，1981，212-213頁。
 - 16) 『台湾日日新報』1928年3月9日。
 - 17) 伊藤武彦「国立公園法解説（一）」国立公園3-7，1931，10-15頁。
 - 18) 「第一回国立公園委員会総会の記」国立公園3-12，1931，26頁。
 - 19) 台湾総督府国土局土木課編『台湾総督府国土局主管 土木事業概要』台湾総督府国土局土木課，1942，141-143頁。
 - 20) 早川直義「嘉義と阿里山」新高阿里山1，1934，37-39頁。
 - 21) 青木 繁「阿里山所感」台湾時報84，1926，42-50頁。
 - 22) 『台湾日日新報』1925年11月23日。
 - 23) 關 文彦「阿里山と田村博士の脚」新高阿里山1，1934，10-12頁。
 - 24) 林 璽堅『躍進嘉義近郊大観』台湾時代嘉義支局，1937。嘉義市役所編『嘉義市を繁栄せしむべき具体的方策』嘉義市役所，1933。
 - 25) 『台湾日日新報』1932年7月17日。
 - 26) 大橋準一郎「国立公園たらんとする大屯山彙」台湾の山林105，1935，1-13頁。なお，本多静六は田村と同じく内地における国立公園指定において重要な役割を果たした人物である。
 - 27) 大屯国立公園協会編『大屯国立公園協会規約及会員名簿』大屯国立公園協会，1940，1頁。
 - 28) 「台北州主催『国立公園としてみたる大屯山彙』座談会」台湾新報183，1935，44-52頁。
 - 29) 鹿又光雄編『始政四十周年記念 台湾博覧会協賛会誌』始政四十周年記念 台湾博覧会，1939，246-247頁。
 - 30) 『台湾日日新報』1932年4月13日。『台湾日日新報』1934年11月17日。
 - 31) 田村 剛「風景地の施設経営（上）」台湾時報101，1928，33-44頁。
 - 32) 『台湾日日新報』1932年4月23日。
 - 33) 台湾総督府編『台湾総督府及所属官署 職員録』台湾時報，1934，246-247頁。
 - 34) 『台湾日日新報』1933年9月27日。
 - 35) 『台湾日日新報』1928年3月14日。
 - 36) 実際に，国立公園候補地が決定すると，内務局土木課の早川は，「国立公園として利用する為の計画及事業」として（A）利用施設（交通施設，休泊施設，保健衛生施設，教化施設）と（B）保護施設（造林施設，養魚施設，砂防施設，防災施設）が必要だとし，その開発計画の構想を披露している。早川透「台湾国立公園の事業と施設」台湾の山林123，1936，85-100頁。
 - 37) 『台湾日日新報』1934年9月5日。
 - 38) これは昭和6（1931）年9月に内地の第三回国立公園調査会で決定された「国立公園の選定に関する方針」である（厚生省国立公園園部監修・田村剛編『日本の国立公園』財団法人国立公園協会，1951，34-35頁）。
 - 39) 新高国立公園候補地は，最終的には新高阿里山国立公園という名称になっている。
 - 40) 『台湾日日新報』1927年5月30日。
 - 41) 『台湾日日新報』1927年8月1日。
 - 42) 『台湾日日新報』1927年8月27日。
 - 43) 前掲42) 参照。また台湾八景に次ぐものとして，八卦山（台中），草山北投（台北），角板山（新竹），太平山（台北），大里簡（台北），大溪（新竹），霧社（台中），虎頭埤（台南），五指山（新竹），旗山（高雄），獅頭山（新竹），新店碧潭（台北）が，台湾十二勝に選定されている。
 - 44) 金平亮三「台湾八景と国立公園」台湾山林会報27，1927，2-5頁。
 - 45) 昭和2（1927）年に東京日日新聞と大阪毎日新聞主催で選定されたもので，八景としては室戸岬（海岸），十和田湖（湖沼），温泉岳（山岳），木曾川（河川），上高地溪谷（溪谷），華嚴瀧（瀑布），別府温泉（温泉），狩勝峠（平原）が選ばれている（白幡洋三郎「日本八景の誕生—昭和初期の日本人の風景観—」（古川 彰・大西行雄編『環境イメージ論—人間環境の重層的風景—』弘文堂，1992）277-307頁）。

- 46) 1位の鸞鼻灯台が35,105,180票を獲得したのに対し（『台湾日日新報』1927年7月29日）、54位の新高山は316,982票しか集めていなかった（『台湾日日新報』1927年7月30日）。
- 47) 1位の台北州が延人数116,538,276人に対し、高雄州が延人数76,962,452人であった（『台湾日日新報』1927年8月1日）。
- 48) 34,978,387票（『台湾日日新報』1927年7月29日）。
- 49) 『台湾日日新報』1927年8月29日。
- 50) 藤井包總「新高山御命名ノ記」新高阿里山1, 1934, ix頁。
- 51) 前掲44) 4頁。
- 52) 木原圓次「国立公園法の一瞥」台湾の山林123, 1936, 9-28頁。
- 53) 台湾国立公園委員会編『第一回台湾国立公園委員会議事録』台湾国立公園委員会, 1936。本節における第一回台湾国立公園委員会に関する情報やそこにおける言説はすべてこの資料を参照した。なお、第一回台湾国立公園委員会は、7名の委員が欠席している。
- 54) 台湾総督府の職員録より確認した。
- 55) 当時の台湾は、日本本土から渡ってきた「内地人」、主に福建省から移民してきた漢民族の「本島人」（「台湾人」とも呼ばれる。時に「高砂族」も含めた総称としても使われる。）、インドシナ系やマレー系人種からなる原住民の「高砂族」（「生蕃」、「蕃人」とも呼ばれる。）、中華民国国籍の人々が大半の「外国人」、そして少数の「朝鮮人」によって構成されていた。昭和10（1935）年段階では、総人口5,315,642人のうち、内地人（朝鮮人含む）は269,798人、本島人は4,839,642人、高砂族は150,489人、外国人は54,109人であった（台湾総督府官房調査課編『昭和十年 台湾総督府第三十九統計書』台湾総督府官房調査課, 1937, 30-31頁）。また本稿では、「蕃人」などの現在では差別的表現と考えられる呼称についても、政治的な問題についても言及する論文の主旨から、基本的に当時と同じ表現を用いることにする。
- 56) 早坂一郎「台湾の国立公園事業に対する希望」台湾の山林123, 1936, 238-241頁。
- 57) 早坂一郎「本邦国立公園の自然地理」台湾地学記事1, 1933, 6-9頁。
- 58) 宮地蒼生夫「史跡名勝天然記念物保存事業に就いて」台湾時報145, 1931, 13-28頁。
- 59) 「台湾の史跡名勝天然記念物」科学の台湾4-3, 1936, 42-45頁。
- 60) 早坂一郎「鸞鼻地方に見らるる地質現象の二三」科学の台湾3-3・4, 1935, 1-8頁。
- 61) 早坂一郎「台湾の国立公園」台湾博物学会会報151, 1936, 182-189頁。
- 62) 前掲1) および14) 参照。
- 63) 前掲15) 192-223頁参照。
- 64) 田村 剛「国立公園問題と林業」台湾の山林119, 1936, 44-49頁。
- 65) 本節における以降の早坂の言説は、すべて前掲61) からの引用である。
- 66) 小濱淨鎌「国立公園の使命」台湾の山林123, 1936, 2-5頁。
- 67) 前掲61) 188頁参照。
- 68) 田村 剛『台湾の風景』雄山閣, 1928, 1頁。
- 69) 田村は、ハワイの国立公園視察を回想し、そこで「熱帯の植物・花・鳥」をみて「此世の極楽のやうな夢心地」に誘われたことを論じている。田村 剛「海外国立公園巡り表2 国立公園三候補地の概略と選定理由[三]ハワイ国立公園」国立公園1-8, 1929, 20-22頁。
- 70) 前掲68) 14頁参照。
- 71) 前掲31) 40-41頁参照。
- 72) 田村 剛「観光地としての台湾」台湾の山林100, 1934, 54-59頁。
- 73) 前掲72) 57頁参照。
- 74) 前掲72) 56頁参照。
- 75) 田村 剛『阿里山風景調査書』台湾総督府営林所, 1930, 24-25頁。
- 76) 前掲75) 3-7頁参照。
- 77) 前掲72) 57頁参照。
- 78) 前掲72) 58頁参照。
- 79) 前掲72) 58頁参照。
- 80) 『台湾日日新報』1928年3月9日。
- 81) 田村 剛「国立公園の選定」国立公園2-8,

- 1930, 5頁。
- 82) 田村 剛『田村林学博士講演 台湾の国立公園』大屯国立公園協会, 1935, 5頁。
- 83) 田村 剛「台湾国立公園の使命」台湾の山林123, 1936, 6-8頁。
- 84) 前掲75) 25頁参照。
- 85) ハンチングトン, E. 著, 間崎萬里訳『気候と文明』中外文化協會, 1922。
- 86) 富田芳郎「植民地としての台湾」台湾地学記事2, 1933, 1-12頁。
- 87) 林 肇『台湾を語る』殖民時代社, 1933, 56-57頁。
- 88) 早川 透「台湾国立公園の事業と施設」, 台湾の山林123, 1936, 85-100頁。
- 89) 鈴木秀夫「国立公園と理蕃」台湾の山林123, 1936, 210-212頁。
- 90) 青木 繁「垂直台湾の意識と理蕃」台湾時報112, 1929, 66-70頁。
- 91) 大橋捨三郎「感想録」台湾山岳11, 1940, 77-81頁。
- 92) 前掲75) 20頁参照。
- 93) 『台湾日日新報』1928年2月1日。
- 94) 前掲21) 48頁。
- 95) 「湾化」は, 身体的, 精神的な台湾化を指し示す語として当時しばしば用いられていた。先述の環境決定論的認識のもとで, 熱帯的気候による日本人の人種の退廃を意味していた。
- 96) 中山喜久松「阿里山登山記」新高阿里山4, 1935, 10-13頁。
- 97) 中島春甫『台北近郊の礁溪・北投・草山・金山温泉案内』台湾案内社, 1930, 3-4頁。
- 98) 前掲26) 3-5頁参照。
- 99) 前掲44) 3頁参照。
- 100) 本多静六『御大典記念 大屯山公園設計概要』台北州, 1934, 3頁。
- 101) 『台湾日日新報』1934年9月5日。
- 102) 田村 剛「造園家の観たる台湾」(石原幸作編『台湾日日新報壺萬號及創立三十周年記念』台湾日日新報社, 1929) 135-147頁。
- 103) 大澤貞吉「台湾のオアシス阿里山の価値に就て」新高阿里山1, 1934, 21頁。
- 104) 近藤幸吉「阿里山の事業懐古」台湾の山林209, 1943, 24-34頁。
- 105) 大橋準一郎「大屯国立公園と桜植栽」台湾の山林191, 1942, 21-32頁。また大屯でも大正4(1915)年以降, 桜の植樹が行われていた。
- 106) U生「營林官制発布並阿里山事業創始二十五周年記念式に参列の記」台湾の山林97, 1934, 84-93頁。
- 107) 小生夢坊『僕の見た台湾・樺太』日滿新興文化協会, 1935, 68頁。
- 108) 青木 繁「台湾の風景を平面的にのみ見ず垂直的に見よ(上)」台湾山岳2, 1928, 104-106頁。
- 109) 佐藤一徳「初めて見る新高を讃ふ」台湾通信2, 1937, 61-64頁。
- 110) 高橋鏡子『女性に映じたる蓬莱ヶ島』秀陽社図書出版部, 1933, 162頁。
- 111) 宮川次郎『台湾放言』蓬莱書院, 1934, 299頁。
- 112) 本間善庫「台湾島の桜化を提唱す」台湾時報5, 1934, 45-47頁。
- 113) 大澤貞吉「阿里山一帯を桜花で包みたい—その時は国立公園以上—」新高阿里山4, 1935, 5頁。
- 114) 出口一重「台湾の国立公園とその使命」台湾時報218, 1938, 90-95頁。
- 115) 矢野 暢『「南進」の系譜』中公新書, 1975, 146-171頁。
- 116) 田村 剛「台湾国立公園の使命」国立公園10-1, 1938, 1頁。
- 117) 郵便掛同人「台湾国立公園を繞りて」台湾通信219, 1940, 29-32頁。
- 118) 藤原記「切手発行に至るまで」台湾通信230, 1941, 110-119頁。
- 119) 郵便掛同人「台湾の国立公園切手愈々発行さる」台湾通信228, 1941, 8-9頁。
- 120) 鈴木登良吉「台湾の国立公園ところどころ」台湾通信229, 1941, 30-54頁。
- 121) 前掲118) 116頁参照。
- 122) 谷川梅人「台湾国立公園切手の長所短所」台湾通信229, 1941, 57-61頁。

The Selection Process of National Park Landscape Areas and the Imaginative Geographies in Taiwan during the Japanese Colonial Period

KANDA Koji

In this paper, I discuss the relationship between the selection process of national park landscape areas and the imaginative geographies in Taiwan during the Japanese colonial period while focusing on the ambivalent and contradictory nature of modern spatiality.

In mainland Japan, twelve national parks characterized by mountain landscapes were designated in 1934 and 1936. Influenced by setting up the national parks in mainland Japan, in 1937 the Taiwan Colonial Government designated three Taiwanese national parks: The Daiton National Park, The Tsugitaka-Taroko National Park, and The Nitaka-Ari Mountains National Park. These Taiwanese national parks were mountain landscape areas as a result of the selection criteria of national parks in mainland Japan being applied to those in Taiwan. Natural, majestic landscapes symbolizing the great Japanese Empire were selected to imply Japanese superiority and attract tourists from all over the world. The bureaucrats of the Taiwan Colonial Government selected the three parks in 1934, and Tsuyoshi Tamura, who had played an important role in selecting national parks in mainland Japan, approved this selection in Taiwan.

However, some local intellectuals living in Taiwan opposed this decision in the first meeting of the Taiwan National Parks Committee, which was held in 1936 to discuss the appropriateness of the three candidate national park areas in Taiwan. Several intellectuals insisted on reducing the number of national parks for the following reasons: a single national park alone would be able to express the pride of Taiwan more effectively; Nitaka and Tsugitaka-Taroko were too close, and similar, to each other to be regarded as separate areas; and Daiton was too small to qualify as a national park. The meeting also involved selecting landscapes that should be included in Taiwanese national parks. Ichiro Hayasaka, a professor at Taipei Imperial University and famous paleontologist, said that the distinctive characteristics of Taiwan could be found in the tropical landscapes. According to him, such landscapes were seldom seen in other Japanese areas and could become important tourist sites. As a result, Taiwanese national parks had to cover the southern area of Taiwan, rich with coral reefs and tropical rain forests. However, Tamura and the government bureaucrats refuted these ideas for the following reasons: the number of national parks in Taiwan was suitable under the Japanese selection standard; the national park landscape areas had to be characterized by mountains for training the mind and body of Japanese subjects; and the aim should not be to turn national parks into tourist spots. These conflicts revealed that the selection of Taiwanese national parks was related to the identity politics of spatial scale between Taiwan and Japan, and that the relations between nationalism and tourism were not always harmonious.

These conflicts emerged especially in relation to the imaginative geographies of the tropical landscape, as seen in the different perspectives of Tamura and Hayasaka with regard to tropical landscape. Tamura and the bureaucrats felt otherness for the Japanese in this landscape and viewed it as opposing Japanese identity. Furthermore, influenced by the notion of environmentalism, they imagined the tropical landscape to be a symbol of the torrid lowlands that would degenerate both the Japanese mind and body. Hayasaka also focused on the otherness of the tropical landscape, but he believed that it evoked the image of the southern paradise that would attract tourists from mainland Japan.

As a result of such ambivalent characteristics of the imaginative geographies of the tropical landscape, Taiwanese national parks differed from those in mainland Japan in some aspects. First, Taiwanese national parks were believed to be places to regenerate the Japanese, who were thought to degenerate while residing in the torrid lowlands of Taiwan, into the authentic Japanese through the

cool air similar to that found in mainland Japan. Thus, despite it being too small to be a national park as per Japanese national park selection criteria, Daiton was selected as a national park because of its proximity to Taipei city, where many Japanese lived, who were thought to require regeneration. The second differing aspect was the approach to tropical landscapes in mountainous areas. Although national parks in Taiwan and Japan were similar in that they were set up in mountainous areas, the former included tropical landscapes that were emphasized in order to make them more attractive. As a result, national parks in Taiwan became hybrid landscapes.

The meanings assigned to tourism and tropical landscapes were changed in the selection process of the Taiwanese national parks. Tamura and the government bureaucrats had often emphasized the importance of tourism and tropical landscapes at the planning stage itself. However, they denied this in the first meeting of the Taiwan National Parks Committee in 1936. Furthermore, after the designation of the Taiwan national parks in 1937, they began to focus attention on the role of tourism and the attraction of tropical landscapes again with the rise of the political desire to conquer southern nations. As seen in this case, in the dynamic process of designating space for national parks in Taiwan during the Japanese colonial period, the relationships among landscapes, imaginative geographies, meanings, politics, tourism, special scales, and so forth, were intricately changing.

Key words: National Park, Landscape, Imaginative geography, Tourism, Politics